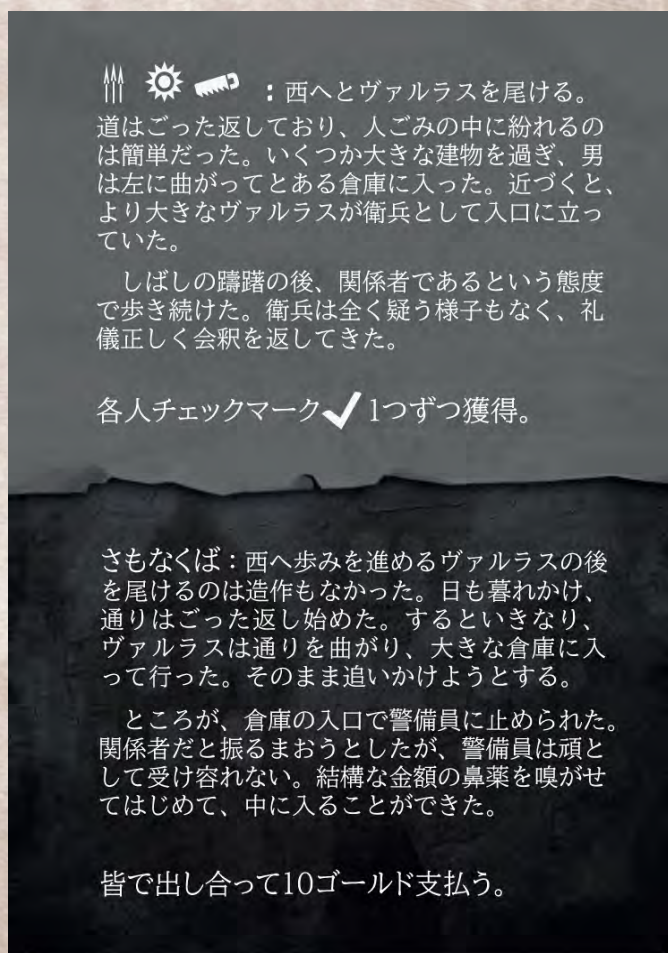
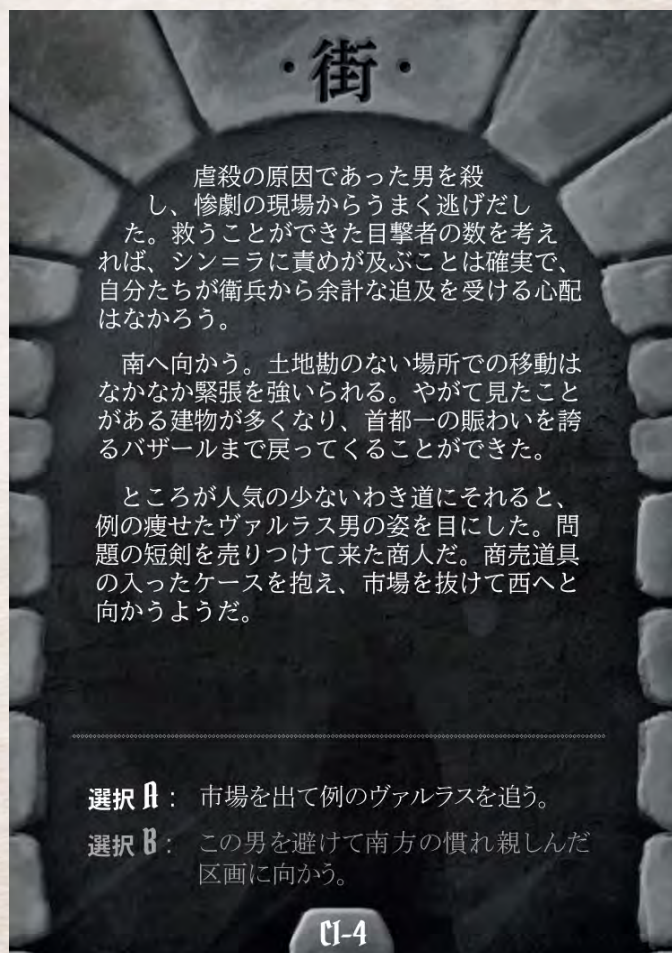


一般市民の死亡数：

- ① 0人
- ② 1～2人
- ③ 3～4人
- ④ 5～7人
- ⑤ 8～11人
- ⑥ 12人



開始条件：なし

目的：待ち伏せのなか、ヴァルラスを生きのまま連行する

序幕：

倉庫は大きく、空に近かったので、例のヴァルラス男を苦もなく探し当てることができた。売れ残りを棚に戻っていた。結果はどうあれ、対峙するには絶好の機会だ。

近づくと、諸君を見上げた男の赤ら顔は、みるみる色を失った。怯えてはいたが、恐怖の対象は必ずしも諸君というわけではないようだ。視線が落ち着きなく倉庫の隅々や天井を行き来した。

「ま、まさか生きておられたとは。今頃は、てっきりもう……」そこで言葉を詰まらせ、声をひそめた。「自分の判断ミスを認めたくないがゆえに、希望的観測にすがっていたようですね」

そいつの襟首を掴み、さらなる弁明を求めた。

「も、もちろん！」男は懇願した。「釈明の機会をいただけるというのであれば、これに優る喜びはありません。けれどそれは、ここではなく——どこか安全な場所まで移動する必要があります」

それが合図だったかのように、背後で炎の柱が立ち昇った。そのなかからサヴァスの巨体が現れる。その腕と胸は熱きマグマで輝いていた。

「見事に尾けられましたね」ヴァルラスが言った。「マークされていたのです。連中に慈悲などという概念はありません。そして今や私もマークされてしまった。やりあいたいのなら止めはしませんが、少なくとも私は、この場から退散いたします。隣のバーに下水道への入口がありますからね」

ヴァルラスは踵を返し、逃走を始めた。「こいつを縛り上げて、衛兵に引き渡すにしくはないか？」という考えが頭をよぎった。

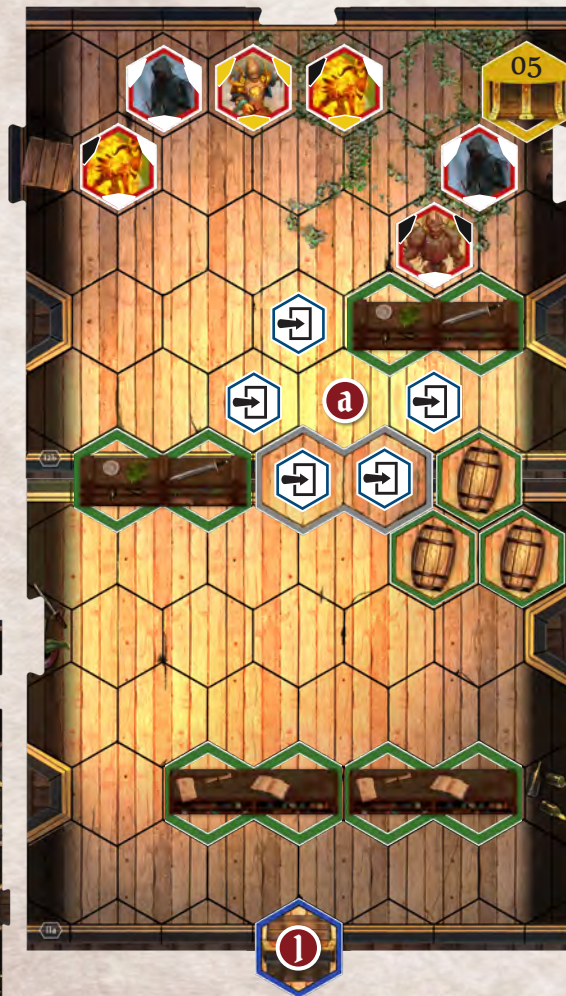
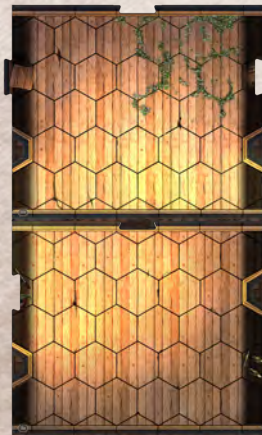
そうすることで諸君は名誉を回復でき、今回の騒動も解決を迎えることだろう。

特別ルール：

ヘクス **a** に、番号があるシナリオ補助トークンを

使用する
地形タイル：

- 11a B2a
- 12b B3a
- G2b B4a
- A1b



-  溶炎のサヴァス
-  カルト信者
-  業火の魔神
-  大地の魔神
-  宝箱 (x1)
-  負傷の罫 (x5)
-  樽 (x3)
-  戸棚 (x2)
-  木箱 (x2)
-  陳列棚 (x2)
-  書棚 (x4)
-  テーブル (x2)

1枚配置してください。これは例のヴァルラス男で、HPは5+2(L+C)です。パーティの仲間で、このヴァルラスが倒れたら、このシナリオはパーティの失敗となります。各ラウンド、このヴァルラスは行動順位10で、扉 **1** へ向けて「移動 **4**」を実行します。そのヘクスに到達したなら、扉は開きます。このヴァルラスに対して、キャラクターは仮の攻撃を仕掛けることで、縛り上げることができます。この仮の攻撃によるダメージは実際の負傷ではなく、縛り上げの進行度(捕縛度)を表すこととなります。仮の攻撃後、このヴァルラスにC以上の仮ダメージを与えたなら(ダメージ・トークンは乗せず)捕縛度を1上げます。捕縛度1ごとに、このヴァルラスの行動順位は+10、移動力は-1となります。捕縛度は最大4であり、下げることはでき

ません。捕縛度4で完全に捕縛されたら、このヴァルラスに隣接するキャラクターは、自分の移動力を2消費することで、このヴァルラスを1ヘクス移動させることができます。

カルト信者が生ける骸骨を召喚する場合、そうせず代わりに溶炎のサヴァスの能力の山の隣にトークンを1つ配置します。このトークンがある状態で、サヴァスの能力の山をめぐることになったら、魔神を召喚するカードが出るまでめくり続け、それを実行してください(山に魔神の召喚カードがない場合、捨て札のより上にある魔神の召喚カードを実行してください)。それから、それ以外の溶炎のサヴァスの能力カードを集めてシャッフルし、新たな山にします。この時、山の脇の全トークンを除去します。

1

倉庫裏手の通路に向かうと、逃走はさほど簡単ではないことが発覚した。こちらに来ることを予想して、さらなる敵が列をなしていたのだ。

「宿命からは逃れられぬぞ」ひとりが言った。「汝らの存在こそが、我らに対する侮辱。即刻その首、シン=ラがもらい受ける」

「バーに行くには、あの罠を抜けるしかありません」ヴァルラスが返した。だがこの男を当局に引き渡すには、逆の道に行くほうが簡単ではなかるうか？

特別ルール：

例のヴァルラスは、いまや扉 ② に向かって移動します。必要なら罠をも踏みます。扉 ② ヘクスに到達したなら、その扉は開きます。



5巻05:アノム04番(録片帳子)

2

「さあ、ここならもう安全で……」ヴァルラスはそこで言葉を失った。またもや敵シンジケートに先を越されていたからだ。バーは一掃され、客の代わりに魔神どもと怒れるサヴァスが陣取っていた。

もはや何も言うべきことなどない。互いに殺し屋稼業に勤しむのみ。

特別ルール：

例のヴァルラスは、いまやヘクス ① に向かって移動します。必要なら罠をも踏みます。かのヴァルラスがヘクス ① に到達したなら、シナリオは成功裏に完遂されるため、終幕Aを読み上げてください。



3

「何をしていますのです？」ヴァルラスが抗議した。「道は逆です！ そちらの扉は街路に続いています。悪漢どもの仲間が、そこらじゅううろついていて、安全とは言えません」

諸君は耳を貸さなかった。犯人を当局に突き出して、汚名を晴らそうと硬く決意していた。自分たちがもう標的にならないよう、なんとか衛兵にシン=ラの謀略を伝えよう。

特別ルール：

かのヴァルラスがヘクス ① に到達したなら、シナリオは成功裏に完遂されるため、終幕Bを読み上げてください。



終幕 A:

「ここを下ってください」洗面所の床のパネルをスライドさせながら、ヴァルラスが言った。再び下水道に足を踏み入れるなど、まったくぞっとしない。とはいえ他の選択肢は、ほぼない。諸君のひとりが先に飛び降り、ヴァルラスが続き、残りのメンバーが後を詰めた。万が一にも逃げようという気を起こさないよう、前後を固めたのだ。

だいぶ消耗していたが、まいたと確信できるまで、曲がりくねった分岐路をひた進んだ。そこでやっとヴァルラスを、ぬめる壁に叩きつけ、釈明を求めた。

「もちろんですとも。たくさん質問があるでしょう。説明させてください……」

報酬:

以降の全アイテムの購入費用 - 2 ゴールド

終幕 B:

流血しつつも、怒りに任せて倉庫から飛び出した。縛り上げられたヴァルラスは「この道ではありません！」と叫び続けている。おかげで衆目を集めることができた。こんな状態では、シン=ラも再び手を出すのは難しかろう。

この騒ぎなら衛兵の到着も遠くはない。あとは連中に、自分たちの無実を信じさせればよいだけだ。

報酬:

各人チェックマーク ✓ 2つずつ